

*別バージョン2 (古そう。すみません。ちょっと汚い)

・いろはに金米糖、金米糖は甘い、甘いは砂糖、砂糖は白い、白いはうさぎ、うさぎは跳ねる、跳ねるは蚤、蚤は赤い、赤いはホウヅキ、ホウヅキは鳴るよ、鳴るのはおなら、おならはくさい、くさいはうんこ、うんこは黄色い、黄色いはバナナ、バナナは高い、高いは十二階

※「十二階」は、浅草公園にあった凌雲閣の俗称。展望台兼レストランで、明治二三年(一八九〇)完成。東京一の高さを誇る建物として連日見物客でにぎわった。大正一二年(一九二二)の関東大震災で、八階部分から折れた。

3、万葉集のことば遊び・文字遊び

① たらちねの母が飼ふ蚕の繭隠りいぶせくもあるか (馬声|蜂音|石花|蜘蛛|荒鹿) 妹に逢はずして(一一・二九九一)

② ……み山には 射目立て渡し 朝狩に 十六履み起し 夕狩に 鳥踏み立て…… (六・九二六)

③ 若草の新手枕を枕き初めて夜をや隔てむ二八十一あらなくに(一一・二五四二)

④ ……わが着たる 衣は穢れぬ 見るごとに 恋はまされど 色に山上復有山ば 人知りぬべみ…… (九・一七八七)

⑤ 百濟野乃 芽古枝尔 待春跡 居之鶯 鳴尔鷄鷓鴣 (八・一四三二)

百濟野の萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむかも

⑥ 海津路乃 名木名六時毛 渡七六 加九多都波二 船出可為八 (九・一七八一)

海つ路の和ぎなむ時も渡らなむ斯く立つ波に船出すべしや

⑦ 言云者 三々二田八醉四 小九毛 心中二 我念羽奈九二(一一・二五八一) 言にいへば耳にたやすし少くも心のうちにわが思はなくに

⑧ 淑人乃 良跡吉見而 好常言師 芳野吉見与 良人四来三(一・二七七)

よき人のよしとよく見てよしと言ひし芳野よく見よよき人よく見

⑨ 来むといふも来ぬ時あるを来じといふを来むとは待たじ来じといふものを (四・五二七)

⑩ 霍公鳥を詠む二首

霍公鳥今来鳴き始む菖蒲蕨くまでに離るる日あらめや毛能波三箇の辞を闕く (一九・四一七五)

(一九・四一七五)

わが門ゆ鳴き過ぎ渡る霍公鳥いや懐かしく聞けど飽き足らず毛能波氏乎六箇の辞を

闕く(一九・四一七六)

尼の、頭句を作り、大伴宿祢家持の、尼に詠へらえて末句を續ぎて和ふる歌一首

⑪ 佐保川の水を塞き上げて植ゑし田を尼作る 刈る早飯は独りなるべし家持續ぐ (八・一六三五)

(八・一六三五)

⑫ 鑑子に湯沸かせ子ども 櫛津の檜橋より来む狐に浴むさむ

さしなべに、湯を沸かせよ、人々よ。櫛津の檜橋を渡って、コンコンと鳴いて来る狐に浴びせてやろう

右の一首は、伝へて云はく、一時に衆集ひて宴飲しき。時に夜漏三更にして、狐の声聞ゆ。爾乃衆諸興麻呂を誘ひて曰はく、この饌具、雑器、狐の声、川、橋等の物に闕けて、但に歌を作れといへれば、声に應へてこの歌を作りきといふ。

(一六・三八二四)

4、竹取物語、土左日記のしやれ

① ……駿河の国にあなる山の頂にもてつくべきよし仰せ給ふ。……御文、不死の菓

の壺ならべて、火をつけて燃やすべきよし仰せ給ふ。そのよしうけたまはりて、つはものどもあまた具して山へ登りけるよりなん、その山をふじの山とは名づけ

ゝる。その煙いまだ雲のなかへたち上るとぞ言ひ伝へたる。(竹取・末尾)

② 藤原のときざね、ふなぢなれど、むまのはなむけす。(土左・二月二二日)

③ かみなかしも、酔ひあきて、いとあやしく、しほうみのほとりにて、あざれあり。(土左・二月二二日)

④ ありとある上下、わらははまで酔ひ痴れて、一文字をだにしらぬ者しが、足は十

文字に踏みぞあそぶ。(土左・一二月二四日)

5、懸詞(掛詞)

波が立つ

・風ふけば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ(古今集九九四)

龍田山(地名)

*和歌の技法には、他に縁語や本歌取りなども

6、物名歌

・いさゝめに時待つ間にぞ日は経ぬる心ばせをば人に見えつゝ(古今集四五四)

(かりそめにその時を待っているそのあいだに、日は経ってしまった。わたくしの気持をあなたの方にたびたび見えるようにしていながらも。)

*笹、松、枇杷、芭蕉葉をよみこむ

7、折句

①むかし、をとこありけり。そのをとこ、身をえうなき物に思ひなして、京にはあらし、あづまの方に住むべき国求めにとて行きけり。もとより友とする人ひとりふたりしていきけり。道知れる人もなくて、まどひいきけり。三河の国、八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるによりてなむ八橋といひける。その沢のほとりの木の蔭に下りて、乾飯食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上(かみ)にすゑて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。

から衣きつゝなれにしつましあれば

はるばるきぬる旅をしぞ思ふ

とよめりければ、皆人、乾飯のうへに涙おとしてほ

とびにけり。(伊勢物語 第九段)

- ①から衣
- ②きつつなれにし
- ③つましあれば
- ④はるばるきぬる
- ⑤たびをしぞおもふ

②言の葉も常盤なるをば頼まなむ松を見よかし経ては散るやは(小野小町)

言葉も不変であるのを頼りにして欲しい。松をご覧なさい。時が経っても散ったりしません。

言の葉は常懐かしき花折るとなべての人に知らすなよゆめ(応えた人の歌)

あなたの言葉はいつも懐かしい花を折るようだと、他の人達には決して知らせないでくださいな。

(『新撰和歌髓脳』(平安時代の歌論)に見える)

- ①このはも
- ②きはなるをば
- ③たのまなむ
- ④まつをみよかし
- ⑤てはちるやは
- ⑥このはは
- ⑦こなつかしき
- ⑧はなをると
- ⑨なべてのひとに
- ⑩らすなよゆめ

*小町は「琴たまへ(琴を貸してください)」と頼んだのに、相手は「琴は無し」と断っている。

③春日山 ④ごとに祈る ⑤大麻を ⑥明らかに見よ ⑦神し守らば

春日山で毎日祈る大麻をはっきりとご覧ください。神が守ってくださいなら。 ※永正三年(一五〇六)二月二十二日に、奈良の春日祭に奉仕して、神前で

詠んだ歌。漢字の折句。「大麻」は、神に捧げる幣の一種。

(『宣胤卿記』(室町時代の公家、中御門宣胤の日記)に見える)

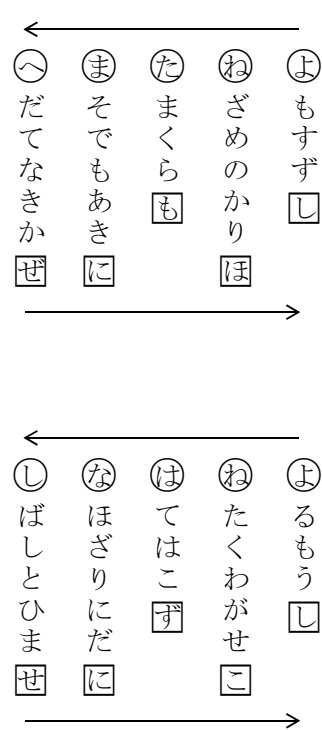
8、沓冠の歌

・夜も涼し寝覚めの仮庵手枕も真袖も秋に隔てなき風(兼好)

夜も涼しい。目が覚めたこの仮の廬では、腕枕も衣の袖も変わらない秋風が吹いて行く。

・夜も憂しねたく我が背子果ては来ずなほざりにだにしばし訪ひませ(頓阿)

夜もつらい。憎たらしくもあなたはついに来ない。たとえかりそめの気持ちでも良いから、しばらく訪ねてきてください。



(『続草庵集』(南北朝時代の歌人、頓阿の歌集)に見える兼好との贈答歌)

*兼好は「米たまへ、銭も欲し」と頓阿に無心し、頓阿は「米はなし、銭少し」と返している。句頭の連続だけでなく、句末の連続にも意味を持たせている歌を「杳冠くつかんむりの歌」という。

9、「いろは歌」の類

①あめつち

- ・あめつちほしそらやまかはみねたにくもきりむろこけひといぬうへすゑゆわさるおふせよえのえをなれゐて(四八字)
- ・天地星空山川峰谷雲霧室苔人犬上末硫黄猿生ふせよ榎の枝を慣れ居て
- *「えのえ」と「え」が重複しているのは、平安初期にはア行のエとヤ行のエとの間に音韻の別があったから。「榎」のエはア行、「枝」のエはヤ行。
- *「あめつち」で始まるのは、『千字文』が「天地玄黄」で始まるのに倣ったものと考えられている。

②たゐに

- ・たゐにいでなつむわれをぞきみめすとあさりおひゆくやましろのうちゑへるこらもほせよえふねかけぬ(四七字)
- ・田居たかに出で、菜摘なつむ我をぞ君召すと、漁あきり追ひ行く山城のうち酔よへる子等、藻も葉干せよ、得船え繫かけぬ

③いろは

- ・いろはにはへとちりぬるをわかよたれそつねならむうのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす(四七字)
- ・色は匂へど 散りぬるを 我が世たれぞ 常ならむ 有為の奥山 今日越えて 浅き夢見じ 酔ひもせず
- *「いろは歌」の全文は承暦三年(一〇七九)の『金光明最勝王経音義』に万葉仮名で書かれているのが現存最古

④とりなくこゑす

- ・とりなくこゑすゆめさませみよあけわたるひんがしをそらいろはえておきつべにほふねむれるぬもやのうち(四八字) 「ん」を含む
- ・鳥啼なく声す、夢覚さませ、見よ明け渡る、東ひんがしを、空色は栄えて沖つ辺に、帆船ほふね群れぬ、靄ものうち
- *明治三十六年に、『万朝報』(黒岩涙香が主宰する新聞)で募集し、その第一位になったもの。埼玉県よろづちの坂本百次郎氏作。

10、回文

- a 新聞紙(しんぶんし)、八百屋(やおや)
竹屋が焼けた(たけやがやけた)、磨かぬ鏡(みがかぬかがみ)
ダンスが済んだ(だんすがすんだ)、私負けましたわ(わたしまけましたわ)
たちまち勝ちました。阪神は、たちまち勝ちました
(たちまち勝ちました。はんしんは、たちまち勝ちました) 《自作・お粗末》
- b 手袋(てぶくろ) ←六撲(ろくぷて)
わたしカスミ草(わたしかすみそう)
←嘘、見透かしたわ(うそみすかしたわ)
気付け!、細部に(きづけさいぶに) ←にぶい酒好き(にぶいさけずき)
- c 山本山、日曜日、水道水、中継中、馬車馬、大阪大、三笑亭笑三、三遊亭遊三、国外日本人本外国《自作・お粗末》
- d 赤坂(AKASAKA)

※古典の回文

①むら草に草の名はもし備はらばなぞしも花の咲くに咲くらむ

(『奥義抄』「草花を詠む古歌」)

*『奥義抄』は平安後期の歌論書。

②長き夜の十(あるいは遠か)の眠りの皆目覚め波乗り船の音の良きかな
(なかきよのおのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな)

*江戸時代に、よい初夢を見るように枕の下に入れた宝船の絵に書いてあった歌。

この歌は中国で万暦二十年(一五九二)刊行の『日本風土記』にも見える。

③身の留守に来ては折り取るこの花は残る鳥をば敵にするのみ(『吾吟我集』)

*『吾吟我集』は、江戸初期の狂歌集。

④目をとめよ梅かながめむ夜目遠目(『毛吹草』「廻文之発句」)

*『毛吹草』は、正保二年(一六四五)刊行の俳書。

浦和で蒔いた、ははは、と母は大麻で笑う



11、パロディー

『またたび浴びたタマ』(村上春樹・文、友沢ミミヨ・画。文藝春秋)

・菜もなき膳にあはれは知られけり鴨焼き茄子の秋の夕暮れ(唐衣橘洲)

*こゝろなき身にも哀はしられけりしぎたつ沢の秋の夕暮(新古今集三六二)

・ほととぎす鳴きつるあとにあきれたる後徳大寺のありあけのかほ(四方赤良)

*ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる(千載集一六一)

12、なぞ、無理問答など

・上は大水、下は大火事、何だ?(なぞなぞ)

・ゆがんだ松とかけて何と解く 郵便屋さんと解く その心は?(三段なぞ)

・一枚でも煎餅とはこれ如何に 一個でも饅頭と言うが如し

・一羽でも鶏とはこれ如何に 一羽でも千鳥と言うが如し(無理問答)

・下戸にご飯(猫に小判)(地口)

・恐れ入谷の鬼子母神、その手は桑名の焼蛤、おっとガッテン承知の助、

来たか長さん待ってたはい、結構毛だらけ猫灰だらけ(無駄口)

13、早口ことば

・生麦生米生卵

(n a m a m u g i n a m a g o m e n a m a t a m a g o)

・バスガス爆発(b a s u g a s u b a k u h a t u)

14、文字遊び

・吹からに秋の草木のしほるればむべ山風をあらしといふらむ(古今集二四九)

(吹くとともに秋の草木がしおれるので、なるほど山風を「あらし」と言うの

だろう。)

・戀(恋)……いと(糸)し、いと(糸)しと言う心

・櫻(桜)……二階(貝貝)の女が気(木)に掛かる

・八十八歳を米寿、七十七歳を喜寿(喜の字の崩し字から)、九十歳を卒寿(卒の字の崩し字から)、九十九歳を白寿(百に一画足りない)